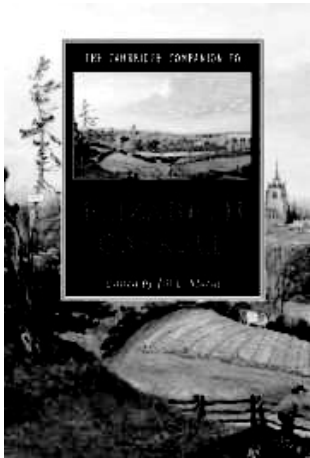


Jill L. Matus, ed.,
The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell
Cambridge: Cambridge UP, 2007. xxi+211pp.

金丸千雪



編者を含む13名の執筆陣によって上梓された本書は表題のとおり、ギaskell研究者あるいはこれからギaskellを研究しようとする学生を対象に執筆された案内書である。Cambridge Companionの名前で知られているこのシリーズは、様々な形態の文学、文化、個々の作家の分かりやすい解説書、あるいは啓蒙書として、もうすでに百種類近く出版されている。わが国の英文学専攻者たちが卒論で取り上げる作家のほとんどの名前は、このシリーズに含まれている。何と言っても、この本は実に使い勝手が良い。年表が後ろではなく、始めに書かれているので、まずそれに目を通して作家の生い立ちが大体、頭に入る。それから、順序にこだわらずに自分が関心を寄せている作品についての章を読めばよい。分量も適当であるし、中身も充実している。特にすばらしいのが、最後に載せられている読書ガイドである。作家の伝記や参考文献一覧、主たる批評書についての情報が的確に提示されている。ギaskellの場合、インターネットによる情報収集まで記されている（もちろん、わがギaskell協会が誇る松岡氏のサイトが示されている）。

このシリーズにギaskellはまだ入っていないのかと、ギaskellを共に読み、語っていた我々協会員たちは首を長くして待っていた。2007年に入ると、ついに執筆陣の意気込みが感じられるこの本が出版された。イギリス、アメリカ、カナダの各執筆者たちが、各自の得意とする分野から、まさに「ギaskell研究」を実践している。最新の情報や知見を精力的に活用しながら、小説読みの名手たちはギaskell文学研究の過去、現在、未来を展望しているのだ。編者が序

論で述べているように、ここ二十年の間にギヤスケルへの見方や批評は確かに変わった。かつて、ギヤスケルはイギリス小説の歴史の中で、マイナーな存在として文学史の一隅に辛うじて名を残すか、あるいは断片的に言及されるにとどまっていた。しかし、現在、いかにギヤスケルが多種多様なテーマをもって小説創作に取り組んだか、そして彼女の視野は驚くほど広いことが広く認識されている。我々は多くの批評家たちが築き上げてきた財産を共有している。そういった中で、各論の執筆者は皆一様に、各作品をあらためて読者の前に引き出し、新たな光をあてることで、ギヤスケルの魅力を鮮やかに浮上させている。

第1章では、ギヤスケル文学のこの主題分野が、どうしてこの執筆者に割り振られたかが編者によって説明されている。この種の解説は、ギヤスケルの小説に関する研究者たちの主要な仕事に分かるので有難い。第2章はギヤスケルの伝記的な側面が彼女の手紙を手がかりとして丁寧に論じられている。ギヤスケルはシャーロット・ブロンテの伝記を書いた後、記述した内容における事実関係をめぐって訴訟うぬぬんというトラブルに巻き込まれた。彼女は意に反して詫び状を雑誌に掲載させたりして、散々、苦勞をした。結果として、自分が書いた手紙は亡くなった後には、全部焼き払ってほしいとの遺言を彼女は残した。それで、彼女が残した手紙は、他のヴィクトリア朝期の文化人に比較するとその量は少ない。その手紙の一部から、ギヤスケルの家族全員を思いやる私生活と同時に、時には体調不良であるが「書く」という使命を果たす作家人生がよく分かる。第3章は『メアリ・バートン』と『北と南』の作品論である。登場人物の解説と読解を中心とした作品考察によって、対象作品の読みどころに気配りがなされた親切な論の運びである。第4章は『克蘭フォード』と『ルース』の論評である。作品に広いコンテクストを与えて、読みの活性化を促している論者の姿勢は快感である。第5章は『シャーロット・ブロンテの生涯』が論じられている。批評史、時代背景とコンテクスト研究の各分野での定評がある研究書に目配りしながらも、著者はあくまでも女性と文学という枠内で、ギヤスケルが切り開いた独自の世界を解説している。第6章は『シルビアの恋人たち』と歴史小説についての考察である。論者は基本的にはフェミニストの立場にいるが、その主張はバランスがとれている。ギヤスケルは必ずしも目的をもった、進化する人間の生活を描いたのではなかったと、論者は述べている。歴史の流れに翻弄される庶民の悲しみと情感こそ

が、ギヤスケルの心を動かし、彼女にペンを執らせたものであったことが理解できる。第7、8章は『従妹フィリス』『妻と娘』、短編小説類であり、フェミニズム文学批評に影響された論文である。小説のシステムが秩序に復帰しなければならない性質上、どのような手法で家父長制社会の闇を描き出すのかについて筆者は考えさせられた。第9章では、ギヤスケルと家族、ジェンダーの関連が提示される。これもフェミニズムが根底にしっかりと存在する。第10章のギヤスケルと社会的変容は、ギヤスケルが生きた時代背景を十分にふまえた論の展開である。第11章の非国教徒についての論文は、ギヤスケルが共同体の精神をいかに尊重したか、その宗教観と社会的な活動の全容が明らかにされている。この本の後半は読み応えがあり、本書の核をなす部分であろう。そして、最後はギヤスケルの今と昔である。紙幅の関係から急いだが、いずれも入門書をはるかに超えた新鮮味があるばかりか、今後の研究において必要と思われる情報ばかりである。綿密に検証されて書かれているので、読者は考えながらゆっくりと読むことが要求される。さっと目を通してあまり意味がないと思われるし、またこれらを十分に理解するには、おそらく他の解説書が必要となる。

最後の章で述べられているまとめを、ここで少し紹介しておきたい。文学関連の遺跡を保存しようと募金活動をする団体、ギヤスケル小説をテレビ・ラジオ化する放送局、学会活動に精を出す大学人たち、人気ツアーを組む旅行会社、それぞれの立場から異なったギヤスケル像が創出されている。ある時は家庭的な婦人であり、ある時は産業資本に精通した企業家としてのギヤスケルである。21世紀に入り、彼女のステイタスを巡る再考はたえまなく行われている。そこでは意見を異にする疑問が発せられ、数々のシナリオが書き続けられている。これから、作品の新たな解釈によってその真価がさらに明らかにされるのだという決意と予想で締めくくられる。

この本の執筆者3人は、1988年に筆者がハル大学で直接に教えを受けた先生方である。あとの1人は2年先輩のハル大学の卒業生である。彼らから一言では言えないくらいに、公私にわたり親身にお世話していただいた。その意味で、筆者は特に丁寧にこの書に向かった。また、博士論文とこの書評を書くためにも、集中してかなりの時間この本と格闘してきた。しかしながら、まだまだ正確に読んでいないし、調べて考えなければならない部分が多い。今後、研鑽を積むつも

りだ。そういう気になる本なのである。年譜、参考文献、索引といった補助資料もきっちりしていて、ギヤスケルが好きで仕方がない本会員の皆様にお薦めをしてみたい。

(九州共立大学教授)